

日本の学習文法で使われる 5 文型について（下）

渡 辺 勉

On the so-called “five sentence patterns” used
in learner’s grammars of English taught in Japan:
part two

Tsutomu WATANABE

キーワード：学習文法，5 文型，Onions，細江逸記，準教科書

4.1. 「英文法準教科書」における 5 文型の記述の実際

前節で「中学校学習指導要領」では 1958 年から 2009 年まで「生徒に 5 文型を教えるようには言っていないのではないかと私見を述べた。しかしながら，安井（1973: 179）は，「5 文型を必ず扱うというのが，教科書検定に対する文部省側の基本方針であるようにさえ思われる」と述べている。安井がこのような主張する背景を八木（2015: 151）は次のように説明している。

「英語 B」の教科書も，技能別，学年別のラインナップで刊行された。（中略）リーダーの教科書が最も多く刊行されたが，昭和 45 年版施行後は専らグラマーのみを扱う教科書（文法事項の解説と練習問題という構成が最も典型的）も多く刊行された。長きにわたり多くの高校で実施されてきた，英語の授業を時間割上「リーダー」と「グラマー」に分ける慣行もこの時期に確立されたものと考えられる。

1982 年施行の「高等学校学習指導要領」で英語の科目名称が，英語 I，英語 II，英語 II A，英語 II B，英語 II C となってからは，文部省検定済みの「英文法教科書」は姿を消した⁽²⁹⁾。しかし，相当な期間に渡って「英文法準教科書」が刊行され続けていた。筆者の手元にある 18 冊の「準教科書」で扱われている「5 文型」の記述を総括する。第 2 章で現行の学習指導要領に基づいた高等学校の「コミュニケーション英語」の教科書の 1 冊である霜崎實（2013）で「5 文型」が記述されていることを見た。単文を超えて「5

文型」の分類がされていることが分かった。以下では、霜崎實（2013）と18冊の準教科書の記述を比較しながら、5つの「文型」ごとに扱われている文の種類を概観する。

4.2.1. 第1文型（S+V）

霜崎實（2013）で扱われているパターンと18冊の準教科書で扱われているパターンを表の形で概観する。いわゆる「第一文型」と分類される英文は、主語と動詞だけで成り立つ短い文とは限らなそうだと見て取れる。

表 6

	S+V	S+V+(M)	S+V+L	There 構文 ⁽³⁰⁾
霜崎 2013	○	×	×	×
安藤 1984	○	○	×	×
牛込 ⁽³¹⁾	○	○	×	○
江川 1982	○	○	×	○
河井 1982	○	○	×	○
河上 1983	○	○	×	○
河上 1987	○	○	×	×
木戸 1981	×	○	×	○
隈部 1986	○	○	×	×
清水 1982	×	○	×	○
杉山 1982	○	○	×	○
鈴木 1987	○	○	×	○
羽鳥 1987	○	○	×	○
福井 1985	○	○	×	○
堀口 1986	○	○	×	×
水野 1987	○	○	×	○
若林 1984	×	○	×	○
安井 1985	○	○	○	×
吉田 1985	○	○	×	×

霜崎實（2013）が第1文型についてS+Vのパターンしか取り上げていないことは既に渡辺（2018: 50）で指摘した。18冊の準教科書は、全て、文法的には省略可能な修飾語句（Modifier）を従えたS+V+(M)を取り上げている。河井迪男（1982: 34）はS+Vについて「ただし修飾語がついて長くなることもあり、短い文とは限らない」と述べている。

河上道生（1987: 4-5）は次のような3つの例文を取り上げている。

- (100) My brother sings well.
- (101) The door opened slowly.
- (102) Oil and water do not mix.

(100) と (101) は修飾語無し of S+V の分かりやすい例を挙げることの難しさを表している。一語の副詞でもある方が自然な英文だということであろう。

open と mix が例文に使われているが、この 2 つは自動詞にも他動詞にも使われる「能格動詞」⁽³²⁾ である。隈部 (1986: 18) と水野 (1987: 1) も open を含む例文を採用している。筆者には「能格動詞」は S+V または S+V+(M) に現れる動詞の典型例 (prototype) ではないような気がする。安井 (1985: 22-23) は、自動詞型の述部と他動詞型の述部の両方に生ずることのできる動詞を 3 つに分類している。(a) 本来的に自動詞用法と他動詞用法とを備えているもの、(b) 目的語が省略されて他動詞用法の動詞に自動詞用法が生じたと考えられるもの、(c) 本来的には自動詞用法である動詞に他動詞用法が臨時的に生じたもの、の 3 つである。

- (103) He left (this place) yesterday.
- (104) She slept a beautiful sleep.
- (105) He walked his dog.

(103) は (b) の例、(104) と (105) とは (c) の例である。S+V+(M) のパターンに取り上げられる例文は (b) また (c) の範疇に入るものが多いように思われる。日本人学習者に何を教えるのかという観点から、さらに調査が必要である。

「場所を表す義務的な前置詞句」(Locative) は安井 (1985) が 7 文型の立場から取り上げているのみである。

There 構文は 12 冊の教科書に取り上げられている。若林 (1984: 24) には次のような例が出ている。

- (106) There is a small flowerpot on my desk.

例文 (106) は、There+V+S+(M) と分析されるのだろう。しかし、“on my desk” は省略可能とは思われない。むしろ、There+V+S+L と分析した方が論理的かもしれない⁽³³⁾。

4.2.2. 第2文型 (S+V+C)

霜崎實 (2013) で扱われているパターンと 18 冊の準教科書で扱われているパターンを表の形で概観する。補語になるのは形容詞と名詞だけでないことがすぐに分かる。

表 7

	形容詞	名詞	that 節	to 不定詞	動名詞	現在分詞	過去分詞	前置詞句
霜崎 2013	○	×	○	×	×	○	○	×
安藤 1984	○	×	×	×	×	×	×	×
牛込 ⁽³⁴⁾	○	×	×	×	×	×	×	×
江川 1982	○	○	○	○	○	○	×	×
河井 1982	○	○	○	○	○	○	○	×
河上 1983	○	○	○	○	○	○	×	×
河上 1987	○	○	×	×	×	×	×	×
木戸 1981	○	○	×	×	×	×	×	×
隈部 1986	○	○	×	×	×	×	×	×
清水 1982	○	○	×	×	×	×	×	×
杉山 1982	○	○	×	×	×	×	×	×
鈴木 1987	○	○	×	×	×	×	×	○ ⁽³⁵⁾
羽鳥 1987	○	○	×	×	×	×	×	×
福井 1985	○	○	×	○	○	○	×	×
堀口 1986	○	○	×	×	×	×	×	×
水野 1987	○	○	×	○	○	×	×	×
若林 1984	○	○	△ ⁽³⁶⁾	○	×	○	○	×
安井 1985	×	○	○	○	×	×	×	○ ⁽³⁷⁾
吉田 1985	○	○	○	○	○	○	○	×

まず補語 (complement) になる語として教授すべき項目は形容詞と名詞であることが分かる。形容詞は 18 冊中 17 冊で、名詞は 16 冊で取り上げられているからである。他の項目は、to 不定詞が 8 冊、動名詞が 6 冊、現在分詞が 6 冊、that 節が 5 冊、過去分詞が 3 冊、前置詞句が 2 冊となっている。

補語になる 8 つの項目を全て網羅している教科書は霜崎實 (2013) を含めて 1 冊もない。that 節、to 不定詞、動名詞、現在分詞、過去分詞が補語になることを説明するかどうかは教科書の編集者が悩むところであろう。いわゆる「5 文型」は教科書の最初の方で扱われることが多い。従って、扱われている文構造が比較的単純だからである。吉田 (1985) は工夫している。教科書の最初の方の §7 で補語が形容詞と名詞の場合のみを扱っている。§32 で補語が that 節を含む名詞節の場合、§33 で補語が to 不定詞の場合、§34 で補語が現在分詞と過去分詞の場合を扱っている。

4.2.3. 第 3 文型 (S+V+O)

霜崎實 (2013) で扱われているパターンと 18 冊の準教科書で扱われているパターンを表の形で概観する。ここでは目的語 (O) になるものの種類を調査する。

表 8

	名詞	to 不定詞	wh+to 不定詞	動名詞	that 節	疑問詞節	if 節
霜崎 2013	○	×	×	×	×	○	○
安藤 1984	○	○	×	×	×	×	×
牛込 ⁽³⁸⁾	○	×	×	×	×	×	×
江川 1982	○	○	○	○	○	○	×
河井 1982	○	○	○	○	○	○	○
河上 1983	○	○	×	○	×	○	×
河上 1987	○	×	×	×	×	×	×
木戸 1981	○	×	×	×	×	×	×
隈部 1986	○	○	○	○	○	○	×
清水 1982	○	○	○	×	×	×	×
杉山 1982	○	○	○	○	×	×	×
鈴木 1987	○	○	×	○	○	○	×
羽鳥 1987	○	×	×	×	×	×	×
福井 1985	○	○	○	○	×	○	×
堀口 1986	○	○	×	○	×	×	×
水野 1987	○	○	×	○	○	○	×
若林 1984	○	○	○	○	○	○	×
安井 ⁽³⁹⁾ 1985	○	○	×	○	×	×	×
吉田 1985	○	○	○	○	○	○	○

名詞は 18 冊の教科書全てで目的語になるものとして取り上げている。他の項目の頻度数は次の通りである。to 不定詞は 14 冊、動名詞は 12 冊、疑問詞節は 10 冊、wh+to 不定詞は 8 冊、that 節は 7 冊、if 節は 3 冊である。

河井 (1982) は全ての項目を取り上げている。記述法に工夫がある。まず、見返しに「5 文型」の全ての型の例文が出ている。「5 文型」を扱う章では、単文を中心とした単純な記述にとどめ、不定詞、分詞、動名詞を扱う章でもう少し複雑な例文を取り上げている。吉田 (1985) も全項目を扱っているが、河井とは対照的に、18 ページを費やして「5 文型」を詳しく扱っている。

4.2.4. 第 4 文型 (S+V+O_i+O_d)

霜崎實 (2013) で扱われているパターンと 18 冊の準教科書で扱われているパターン

を表の形で概観する。ここでは直接目的語（O_d）になるものの種類を調査する。

表 9

	名詞	to 不定詞	wh+to 不定詞	疑問詞節	that 節	if 節
霜崎 2013	○	×	×	○	○	×
安藤 1984	○	×	○	×	×	×
牛込 ⁽⁴⁰⁾	○	×	×	×	×	×
江川 1982	○	○ ⁽⁴¹⁾	○	○	○	×
河井 1982	○	○ ⁽⁴²⁾	○	○	○	○
河上 1983	○	×	×	×	×	×
河上 1987	○	×	×	×	×	×
木戸 1981	○	×	×	×	×	×
隈部 1986	○	×	×	×	×	×
清水 1982	○	×	○	×	×	×
杉山 1982	○	×	×	○	×	×
鈴木 1987	○	○ ⁽⁴³⁾	○	×	×	×
羽鳥 1987	○	×	×	×	×	×
福井 1985	○	×	×	×	×	×
堀口 1986	○	×	×	×	×	×
水野 1987	○	×	×	×	×	×
若林 1984	○	×	○	○	×	×
安井 1985	○	×	×	×	×	×
吉田 1985	○	×	○	×	○	○

名詞は 18 冊の教科書全てで目的語になるものとして取り上げている。他の項目の頻度数は次の通りである。wh+to 不定詞が 7 冊，疑問詞節が 5 冊，that 節が 4 冊，to 不定詞が 3 冊である。注釈でも指摘したとおり，江川（1982），河井（1982），鈴木（1987）は，次の例文（107），（108），（109）の中の不定詞句を直接目的語と分析している。

（107） Nancy asked me to drive her home.（江川 1982: 11）

（108） He told me to drive more slowly.（河井 1982: 見返し）

（109） He asked me to lend the book.（鈴木 1987: 12）

筆者の仮説であるが，不定詞句を直接目的語と分析したきっかけは，英語教育の観点から言うならば，Hornby（1954: 20-21）⁽⁴⁴⁾の影響ではないかと思われる。Hornby は verb pattern 3 で 15 個の動詞を取り上げている。want, wish, help, allow, like, ask,

teach, bear, mean, prefer, cause, warn, order, advise, lead である。動詞の後に続くのは名詞と to 不定詞である。Hornby は次のように述べている。

In this pattern the verb is followed by a (pro)noun and a *to*-infinitive, so closely connected that they form a unit. This is sometimes called the 'accusative and infinitive' construction.

Hornby も日本の文法研究者たちも「不定詞付き対格」(accusative with infinitive)⁽⁴⁵⁾ という概念を使うときに Jespersen の影響を受けていると思われる。Jespersen (1949 part V: 279) は「不定詞の対結」(infinitival nexus) を (110), (111), (112) の 3 つに分類している。[] 内の分析は Jespersen のものである。

(110) I hear him sing. [SVO (S₂I)]

(111) I allow her to sing. [SVOiO (I)]

(112) We forced him to obey. [SVOpI]

石橋光太郎他 (1964: 120) は Jespersen (1949) の解説の中で、(110) は「主語＋不定詞」が明らかに主動詞の目的語である場合、(111) は「人が動詞の間接目的語、不定詞は直接目的語と考えられる場合」、(112) は「人が動詞の直接目的語、不定詞は 'to' によって結ばれた 3 位語 (tertiary) と考えられる」と翻訳している。

日本の学習文法では (110), (111), (112) を全て SVOC と分析することが多いということは表 9 と表 10 の教科書の分析から分かる。しかしながら、江川 (1982), 河井 (1982), 鈴木 (1987) のように不定詞句を直接目的語と分析した教材が存在していたわけで、教育現場ではどのように混乱を防いだのか興味がわく。今後の調査研究を必要とするところである。

4.2.5. 第 5 文型 (S+V+O+C)

霜崎實 (2013) で扱われているパターンと 18 冊の準教科書で扱われているパターンを表の形で概観する。ここでは補語 (C) になるものの種類を調査する。

名詞は 18 冊の教科書全てで補語になるものとして取り上げている。他の項目の頻度数は次の通りである。形容詞が 17 冊、現在分詞が 7 冊、原形不定詞が 6 冊、to 不定詞が 5 冊、過去分詞が 3 冊である。

さて、(113) のような to 不定詞を含む英文について、分析が割れている。

表 10

	名詞	形容詞	原形不定詞	to 不定詞	現在分詞	過去分詞
霜崎 2013	○	×	○	×	○	○
安藤 1984	○	○	×	×	×	×
牛込 ⁽⁴⁶⁾	○	○	×	×	×	×
江川 1982	○	○	○	○	○	○
河井 1982	○	○	○	×	○	×
河上 1983	○	○	○	×	○	×
河上 1987	○	○	×	×	×	×
木戸 1981	○	○	×	×	×	×
隈部 1986	○	×	×	○	×	×
清水 1982	○	○	×	×	×	×
杉山 1982	○	○	×	○	×	×
鈴木 1987	○	○	×	○	○	×
羽鳥 1987	○	○	×	×	×	×
福井 1985	○	○	×	×	×	×
堀口 1986	○	○	×	×	×	×
水野 1987	○	○	×	×	×	×
若林 1984	○	○	○	×	○	○
安井 1985	○	○	○	○	○	○
吉田 1985	○	○	○	×	○	×

(113) They wanted her to play the piano. (安井 1985: 29)

江川 (1982), 隈部 (1986), 杉山 (1982), 鈴木 (1987), 安井 (1985) は SVOC として説明している。

ところが, 若林 (1984: 34-35) は tell, ask, want が使われる文型を「主語+動詞 (tell など)+目的語+to+原形」の「文型」として別の章を立てている。吉田 (1985: 35) は, want, allow, expect, ask, tell⁽⁴⁷⁾ を含む英文を「S+V+O+不定詞」として扱い, SVOC とは別項目を立てている。4.2.4 節の第 4 文型 (S+V+O_i+O_d) の分析の中で不定詞句を直接目的語と分析した教科書が存在したというのと共通の問題である。「不定詞付き対格」が Jespersen によって 3 つに分類されているという事実と関係があるのであろう。

しかしながら, 筆者には安井 (1985: 27) に代表されるように, 原形不定詞または to 不定詞を含む英文には, 一貫して「S+V+O+C (不定詞)」という分析を与え, O と C (不定詞) の間には, 「意味上の主語述語関係」(nexus) があると記述する方が学習効

果が上がるように思われる⁽⁴⁸⁾。

5. 「7 文型」と「8 文型」

4.2.1 節の第 1 文型と 4.2.3 節の第 3 文型の分析で、安井 (1985) だけが SVL と SVOL を、それぞれ SV または SVO の拡張として取り上げていた。いわゆる「7 文型」の考え方である。

社会人用の英語再入門書と思われる佐藤・小池 (2016: 29-31) は「8 文型」の考え方を絶賛している。SV, SVA, SVC, SVCA, SVO, SVOA, SVOO, SVOC の 8 つである。根拠は安藤 (2005: 15-26, 778-841) が「8 文型」の分析を提案しているからである。

SVCA は、八木 (1999: 140-181) と八木 (2011: 73) が指摘するとおり、「形容詞形」であるから「動詞の文型」からは除外するのが妥当だと思われる。

7 文型の考え方が注目されるようになったのは、少なくとも日本では、Quirk et al. (1985)⁽⁴⁹⁾ の出版からであろう。例示のために例文を引用する。

(114) Prices rose. [SV] (Quirk et al. 1985: 56)

(115) Elizabeth enjoys classical music. [SVO] (Quirk et al. 1985: 56)

(116) Your face seems familiar. [SVC] (Quirk et al. 1985: 56)

(117) My sister lives next door. [SVA] (Quirk et al. 1985: 56)

(118) We all wish you a happy birthday. [SVOO] (Quirk et al. 1985: 56)

(119) The president declared the meeting open. [SVOC]

(Quirk et al. 1985: 56)

(120) The doorman showed the guests into the drawing room. [SVOA]

(Quirk et al. 1985: 56)

義務的な副詞句 (obligatory adverbials) を含んだ SVA と SVOA が従来の 5 つのパターンに加わって 7 つになっている⁽⁵⁰⁾。「7 文型」では義務的な副詞句が加わったことに注目が集まりがちだが、筆者は文の中の副詞句が情報伝達の上で果たしている役割に注目することの方が、もっと大切ではないかと考える。その次に副詞句が義務的なのかそうでないのかを考える方が分かりやすいのではないと思う。

実際、Quirk et al. (1985) は、いきなり (114) から (120) の 7 つのタイプを提示しているわけではない。[Type SVO], [Type SVA], [Type SVOA] の 3 タイプについては、まず、義務的な副詞句 (obligatory adverbials) と省略可能な副詞句 (optional adverbials) の両者を含んだ例文を示し、次に省略可能な副詞句を削除した例

文を提示している。以下に例文を引用する。省略可能な副詞句は、筆者が斜体字にしてある。

(121a) My mother *usually* enjoys parties *very much, usually*.

(Quirk et al. 1985: 51)

(121b) My mother enjoys parties. [Type SVO] (Quirk et al. 1985: 53)

(122a) I have been in the garden *all the time since lunch*.

(Quirk et al. 1985: 52)

(122b) I have been in the garden. [Type SVA] (Quirk et al. 1985: 53)

(122c) *I have been all the time since lunch. (Quirk et al. 1985: 52)

(123a) You must put all the toys upstairs *immediately*. (Quirk et al. 1985: 52)

(123b) You must put all the toys upstairs. [Type SVOA]

(Quirk et al. 1985: 53)

(123c) *You must put all the toys immediately. (Quirk et al. 1985: 52)

(121a) と (121b) の対比は目的語 (object) と副詞類 (adverbials) との違いを例示するため、(122a) と (122b)、(123a) と (123b) との対比は義務的な副詞句と省略可能な副詞句との違いを例示するためと考えられる。(122c) と (123c) によって義務的な副詞句を省略すると英語として成り立たず、非文 (non-sentence) になってしまうことが示されている。日本の学習文法で教授される文型の話では、SV と SVM または SVA との対比として説明されていると思われる。5 文型の立場で modifiers (M) と扱うにせよ、7 文型の立場で adverbials (A) と扱うにせよ、副詞句の位置づけが分かりにくい。Quirk らの説明の手順の方が明快である。

Quirk et al. (1985) の「7 文型」を受け入れながら、修正を加えている研究もある。松浪勇 (1988: 101) は、Quirk et al. の SVOA の例文を取り上げながら次のように述べている。

上例の副詞語句（ここでは全て前置詞句）は、それらがなければ文が完結しないので、節の構成要素であることは明らかであり、したがって義務的である。このようにこの種の副詞語句と補語には近似性が認められるので、「5 文型」にしても、その下位区分に義務的副詞語句を組み入れることができればそれでもよいであろう。

SVL を SVC の下位区分にして、SVOA を SVOC の下位区分にするという提案である。SVC と SVOC を上位区分にするということは、下位区分は教えないという自由も生まれるわけで、学習者の状況によって対応を変えられるようになる。「日本の中学校、高

等学校で「7 文型」を教えるべきか」という問いに対しては、加藤 (2017: 27) が「5 文型・7 文型・8 文型等諸説あるが、高校入門期では 5 文型による指導が妥当である」と述べていることが回答になる。

6. 「5 文型」によって何を教えるのか

4 節で見たとおり、1958 年告示の「中学校学習指導要領」を参照してみると、「主語＋動詞の文型」、「主語＋動詞＋補語の文型」、「主語＋動詞＋目的語の文型」、「主語＋動詞＋間接目的語＋直接目的語の文型」、「主語＋動詞＋目的語＋補語の文型」という記述はあるが、「5 文型」の「5」という数字は見当たらない。ところがこの数字にこだわっている人々がいる。6.1 ではその例を 2 つ取り上げる。

6.1. 「5 文型」を表す数字の意義

川嶋政士 (2014b: 137) は、2013 年 6 月に大学の 1, 2 年生 172 名を対象に次のようなアンケート調査をしている。

PART I

英語の 5 文型を書きなさい。(アルファベットを用いて)

第 1 文型

第 2 文型

第 3 文型

第 4 文型

第 5 文型

大学生たちに文型の番号を使って「5 文型」の知識がどの程度あるかを調査しているわけである。しかし、第 1 文型 (S+V)、第 2 文型 (S+V+C)、第 3 文型 (S+V+C)、第 4 文型 (S+V+O+O)、第 5 文型 (S+V+O+C) という数字とアルファベットの組み合わせを学習者に暗記させることが「5 文型」という考え方をを使う目的ではないだろう。

ところが準教科書の中にも「何文型か」と数字で答えさせる例が存在したのである。羽鳥 (1987: 9) は次の (124) から (127) の例文に対して「次の文は何文型か言え」と指示している。[] 内は筆者による分析である。

(124) He is my best friend. [S+V+C]

(125) We won the baseball game 3 to 2. [S+V+O+M]

(126) The gentleman left a tip on the table. [S+V+O+M]

(127) We wash before meals. [S+V+M]

それぞれの文を主語，動詞，補語，目的語，修飾語に分析させて，あるいは教師が分析を与えて，日本語で意味を言わせる方が学習効果が上がると思われる。準教科書の1冊である江川（1982: 14）は次のように述べている。

これで5文型の勉強は終わりである。（中略）そこで諸君に1つのアドバイスを与えておきたい。文型の番号などは忘れてしまわないさい。ある1つの英文が第何文型かを考える必要はない。意味が分かればよいのである。そのために文型の勉強をしたのだから。

大学の専門課程で文法の専門家を育てているのではないのだから，文法分析が英文法学習の目的になってはならないという教訓である。

6.2. 英語は SVO, 日本語は SOV

筆者は「5文型」を教えることの意義の一つは，日本語と英語の語順の違いを明示的に教えることではないかと考えている。一般言語学的な観点から日本語と英語の語順の違いを論じている言説をいくつか見てみる。

国廣（1980: 1）は，「通常，日本語は SOV, 英語は SVO であるとされている」と述べている。言語類型論の立場からの言説である。その分野の研究書を3冊ほど見てみる。

Comrie（1989: 87）と Dryer（2007: 79）によれば，世界の言語は類型論的に6通りに分類される。文を構成する主要な構成要素である主語（S），目的語（O），動詞（V）がどのような順序で並ぶのが無標の語順であるかを考えるわけである。その分類は，SOV, SVO, VSO, VOS, OVS, OSV の6つである⁽⁵¹⁾。Dryer（2007: 62, 68）は世界の言語で一番多い語順は SOV であり，二番目に多い語順は SVO であると述べている。SVO の言語の最初の例として英語を取り上げて，次のような例文を挙げている。

(128) The woman saw the dog. (Dryer 2007: 68)

S V O

Comrie（1989: 87）では，SOV の語順を取る言語の例としてトルコ語を取り上げていて，残念ながら日本語の例はない。旧版の Comrie（1981: 6）は，日本語の基本的な語順⁽⁵²⁾は SOV であると説明し，次のような例文を挙げている。

(129) Hanako ga Taroo o butta (Comrie 1981: 6)

日本語話者を対象とする英語教育の研究の中でも、英語と日本語が世界中の言語の中でどのような位置にあるかを考えることは必要であると思う。以上、一般言語学的な立場から語順とは何を意味するのかを検討してみた。

さて、焦点を英語の話に戻す。Quirk (1985: 51) では次のような例文を取り上げて、文の中の要素の移動に制限があることを示し、英語の語順は比較的固定している ('fixed word-order language') と述べている。平叙文では SVO が普通 (regular) としている。

(130) My mother usually enjoys parties very much. [SAVOA]
(Quirk 1985: 51)

(131) Usually my mother enjoys parties very much. [ASVOA]
(Quirk 1985: 51)

(132) My mother enjoys parties very much, usually. [SVOAA]
(Quirk 1985: 51)

(130), (131), (132) の例から副詞句 (A) は文中で、かなり自由に移動できることが分かる。ところが、S, V, O の移動には制限があることが以下の (133), (134), (135) から例示されている。

(133) *Usually enjoys parties my mother very much. [AVOSA]
(Quirk 1985: 51)

(134) *Enjoys my mother parties very much. [VASOA] (Quirk 1985: 51)

(135) *My mother parties usually enjoys very much. [SOAVA]
(Quirk 1985: 51)

(133), (134), (135) から次の 2 点が例示されていると言える。1 つめは英語の基本的な語順は SVO であり、平叙文では、動詞 (V) を主語 (S) の前に持って行ってはいけないこと、2 つめは目的語 (O) を動詞の前に持って行っては行けないことである。副詞句 (A) の一部が主語と動詞の間に入れることは (130) から分かる。

このように、(133), (134), (135) のような英文はあり得ないということを理解するためには、まず、英語の基本語順 SVO を習得する必要がある。「5 文型」が日本人学習者の英語習得のために与えられた役割は 2 つあると思う。1 つめは英文の意味を、ただ単語の意味をつなげるのではなく、分析的に単語と単語の間の掛かり具合を理解した上で、解釈できるようにすることである。2 つめは日本人学習者が SV, SVC, SVO,

SVOO, SVOC という語順で英語を並べられるようにし、発信型の英語学習を助けることであると筆者は考える。

7. 結 論

5 節の終わりで加藤 (2017: 27) が「高校入門期では 5 文型による指導が妥当である」と述べていると指摘した。これは無批判に「5 文型」を教え続ければ良いということではない。

岩田 (2014), 大津 (2004), フクチ・高橋 (2015), 宮永 (2014), 細江 (1971), 「コミュニケーション英語の教科書」である霜崎 (2013), 18 冊の英文法準教科書で記述されている「文型」の例文を分析して分かったことが 3 つある。

1 つめは、4 冊の社会人のための啓蒙書では単文 (simple sentence) しか扱っていないことである。英文法準教科書の中でも、安藤 (1984), 牛込, 河上 (1987), 木戸 (1981), 清水 (1982), 羽鳥 (1987) の 6 冊は, SVC, SVO, SVOO のパターンの例示で単文しか使っていない。これは Onions と細江の記述法を受け継いでいると思われる。残りの 12 冊は that 節などの従属節を含む複文 (complex sentence) も例示で扱っている。霜崎 (2013) も同様である。

2 つめは、補語 (C) や目的語 (O) になるものの多様性である。SVC を例に取ると、形容詞, 名詞, that 節, to 不定詞, 動名詞, 現在分詞, 過去分詞, 前置詞句が補語になり得る。“I am happy.” のような文だけを教えるのが「5 文型」を使った授業ではないはずである。

3 つめは、準教科書の記述に議論を呼びそうな異同があることである。SVOO と SVOC の例示の中で to 不定詞を目的語として扱うのか補語として扱うのかという分析の立場に違いがあることが分かった。

20 世紀の文法書 Quirk et al. (1985) は、「義務的副詞類」という概念を導入して「7 文型」という分析を提案した。21 世紀になって変化はあったのだろうか。Huddleston & Pullum (2002: 218) は、文の構造をいくつに分析できるかという問題に対しては、five canonical constructions という立場を取っている。以下に例文を引用する。() 内の表記は Huddleston & Pullum のもの, [] 内の表記は Huddleston & Pullum の記述を筆者が取り入れたものである。P は predicate を, PC は predicate complement を表す。

(136) I left. (S-P) [intransitive]

(137) I got better. (S-P-PC) [complex intransitive]

- (138) I took the car. (S-P-O) [monotransitive]
(139) I gave Jo a key. (S-P-O-O) [ditransitive]
(140) I kept it hot. (S-P-O-PC) [complex monotransitive]

Huddleston & Pullum (2002: 219) は, Quirk et al. にない提案をしている。Valency (結合価) という概念である。例示のために例文を引用する。[] 内の表記は Huddleston & Pullum のものである。

- (141) He died. [intransitive; monovalent]
(142) This depends on the price. [intransitive; bivalent]
(143) Ed became angry. [complex intransitive; bivalent]
(144) He read the paper. [monotransitive; bivalent]
(145) He blamed me for the delay. [monotransitive; trivalent]
(146) This made Ed angry. [complex monotransitive; trivalent]
(147) She gave him some food. [ditransitive; trivalent]

従来の目的語 (object), 補語 (complement), 義務的前置詞句 (prepositional phrase) を, まとめて, 補語 (complement) という上位概念でひとくくりにしよという分析である。動詞がいくつの complement を必要とするかという観点から説明するものである。決して最近生まれた分析法ではない。Allerton (1982) は英語について詳細な分析を提供している。

日本では, 小泉 (2007, 2009) が結合価文法 (valency grammar) による日本語と英語の分析を提案している。

小泉 (2007: 238-239) では, Hornby (1954) の 25 の動詞形を「5 文型」に還元して整理している。

- (A) SV (20, 21, 23, 24, 25)
(B) SVC (22)
(C) SVO (1, 2, 3, 10, 11, 15, 17, 18, 19)
(D) SVOO (12, 13, 14, 16, 19)
(E) SVOC (4, 5, 6, 7, 8, 9)

さらに, 小泉が推奨している「結合価文法」のひとつ Allerton (1982) による結合価による動詞の分類を, やはり, 「5 文型」に還元して整理している。

- (ア) 無価動詞 [SV (S は非人称の it に限る)]
- (イ) 1 価動詞 [SV, SVC (C が形容詞の場合)]
- (ウ) 2 価動詞 [SVO, SVC (C が名詞の場合)]
- (エ) 3 価動詞 [SVOO, SVOC (C が名詞の場合)]

小泉 (2009: 191) は、次のように述べている。

このアニアズスの 5 文型は日本の英文法理論を 50 年以上にわたって支配してきたし、今でもゆるぎないものがある。この間にチョムスキーの変形理論は、提起され、展開され、衰亡するという過程を踏んできた。これらの差はアニアズスの 5 文型とチョムスキーの分析理論の妥当性に基づくものである。任意の英文が与えられれば、それが 5 文型のいずれに相当するか決定するのは容易である。だが、変形文法⁽⁵³⁾は条件ばかりやかましくて、英文の文構造を提示することはほとんどなかった。

変形生成文法は that 節や to 不定詞などを含む補文構造の説明に、稲田 (1989) に代表されるような成果を残している。結合価文法は日本ではあまり馴染みがないが、辞書の記述の中に取り入れられている。細江逸記の著述がもととなって日本に根付いてきた「5 文型」を大切にしながら、新しい学習文法を開発していく必要がある。

謝辞

この研究は 2016 年度に拓殖大学人文科学研究所から個人研究助成を受けた。関係者の皆様に心から感謝申しあげる。

《注》

- (29) 準教科書の 1 冊、杉山 (1982) のはしがきに「1982 年度から、新学習指導要領に則って、文部省検定の英文法教科書がなくなる。」とある。
- (30) There is [are] ..., Here is [are] ..., の構文のこと。
- (31) 牛込久男の本には出版年の記載が無い。
- (32) 影山 (2001: 15) は、(a) The boy broke the vase. (他動詞) と (b) The vase broke. (自動詞) という例を挙げ、break と同じ自他交替を示す動詞は、open, shut, shatter, drop, slide など多数あり、能格動詞 (ergative verbs) と呼ばれると述べている。影山 (1996: 140-141) にも同様の記述がある。『ルミナス英和辞典』(2005) には該当する動詞に自他交替の表示がある。
- (33) Quirk et al (1985: 1403-1404) は existential there と 7 つの basic clause patterns とを以下のように対応させている。A は義務的副詞句 (obligatory adverbials) を表す。

- (1a) Something must be wrong. [SVC]
- (1b) There must be something wrong.

- (2a) Was anyone in the vicinity? [SVA]
- (2b) Was there anyone in the vicinity?
- (3a) No one was waiting. [SV]
- (3b) There was no one waiting.
- (4a) Plenty of people are getting promotion. [SVO]
- (4b) There are plenty of people getting promotion.
- (5a) Two bulldozers have been knocking the place flat. [SVOC]
- (5b) There have been two bulldozers knocking the place flat.
- (6a) A girl is putting the kettle on. [SVOA]
- (6b) There's a girl putting the kettle on.
- (7a) Something is causing my friend distress. [SVOO]
- (7b) There's something causing my friend distress.

There 構文は 7 つの「文型」に渡るといふ Quirk らの主張である。

- (34) 牛込久男の本には出版年の記載が無い。
- (35) “The ground was in bad condition.” という例文が出ている。
- (36) “The problem is whether they are going to help each other.” という例文が出ている。
- (37) “My stomach is somewhat out of order.” という例文が出ている。
- (38) 牛込久男の本には出版年の記載が無い。
- (39) 安井 (1985: 12) は第 3 文型 (SVO) の拡張として SVOL を取り上げている。“He put the kettle on the stove.” が例文として挙げられている。
- (40) 牛込久男の本には出版年の記載が無い。
- (41) “Nancy asked me to drive her home.” という例文が出ている。この例文を SVOO ではなく、SVOC と分析する立場もある。例えば、準教科書の 1 冊である隈部 (1986: 24) は “We asked him to play the recorder.” を SVOC のセクションで扱っている。
- (42) “He told me to drive more slowly.” この例文を SVOO ではなく、SVOC と分析する立場もある。例えば、準教科書の 1 冊である隈部 (1986: 24) は “John told us to finish the work at once.” を SVOC のセクションで扱っている。
- (43) “He asked me to lend the book.” という例文が出ている。この例文を SVOO ではなく、SVOC と分析する立場もある。例えば、準教科書の 1 冊である隈部 (1986: 24) は “We asked him to play the recorder.” を SVOC のセクションで扱っている。
- (44) Hornby (1975: 62–64) では、VP17A と VP17B に二分している。“the accusative and infinitive construction” という表現はない。VP17A は目的語を主語に変えて受動文を作れる動詞、VP17B は受動文を作れない動詞と説明されている。ちなみに ask と tell は受動態を作れる動詞である。
- (45) 渡辺 (2018) の注釈の (12) で既に言及したように、「5 文型の祖」と言われることのある Onions も accusative with infinitive という概念を使っている。Onions (1911: 128) では、“Report declared him to be dead.” において “him to be dead” の部分を不定詞付き対格 (accusative with infinitive) と呼び、“him” と “to be dead” は分離不可能と述べている。後の構造言語学流に解釈すれば、「不定詞付き対格」の部分を目的語 (節) とする考えにつながる。
- (46) 牛込久男の本には出版年の記載が無い。
- (47) Jespersen (1949 part V: 279–290) によれば、ask, allow, expect, tell, want は [SVO_iO (I)] と分析されるようである。
- (48) 八木 (2011: 73–74) は次の江川 (1991) の 3 つの例文について見解を述べている。[]

(c) I wish you to come home with me and meet my people. [SVO (sv)]

- (f) *太郎が発明した一内出の小槌を一のは西暦 2032 年のことである。[*は非文を表す]
- (g) *もし太郎が発明する一内出の小槌を一ば、日本のエネルギー問題は一举に解決する。

語順に自由度があるのは、(a), (b), (c) のような独立文 (simple sentence) の場合であって、従属文の中では動詞が句末に来るというのが黒田の主張である。

- (53) 中村 (2009: 66) は、「豊富な例によって支えられている伝統的な記述文法は英語力の養成には最適の文法である。しかし一方、従来の Onions の 5 文型に基づく英文法は速やかに排除され、生成文法的基本文型に基づく英文法への変換が必要であることを強調しておきたい。」と論文を結んでいる。枅矢・福田 (1993: 32-38) は 5 文型の分析を例文を挙げながら樹形図を使って説明している。

- (a) My English teacher sent me a lot of English books. [SVOO]
- (b) John's father made him a doctor. [SVOC]

SVOO の文では 2 つの目的語が 2 つの名詞句 (NP) と説明されている。SVOC の方では、O と C は小節 (small clause) を形成していると説明している。しかし、伝統文法で Jespersen (1949) が nexus (対結) と分析したと大差はないように思われる。

参考文献

- 安藤貞雄訳 1969.『C. T. アニアンズ 高等英文法』文健書房
安藤貞雄 1989.『はじめてわかる英文法』英潮社新社
安藤貞雄 2005.『現代英文法講義』開拓社
安藤貞雄 2008.『英語の文型』開拓社
井上永幸・赤野一郎 2013.『ウィズダム英和辞典』第 3 版
池上嘉彦 1991.『〈英文法〉を考える』筑摩書房
石橋光太郎・桃沢力・五島忠久・山川喜久男 1964.『O. イエスベルセン』不死鳥英文法ライブラリー 10 南雲堂
稲田俊明 1989.『補文の構造』大修館書店
岩田一男 2014.『英語に強くなる本 教室では学べない秘法の公開』ちくま文庫 筑摩書房 (岩田一男 1965.『英語に強くなる本 教室では学べない秘法の公開』改訂新版 光文社カッパ・ブックス)
江川泰一郎 1964.『英文法解説』改訂新版 金子書房
江川泰一郎 1991.『英文法解説』改訂 3 版 金子書房
江川泰一郎著・葉袋義郎 2014.『江川泰一郎 英文法の基礎』研究社
大津由紀雄 2004.『英文法の疑問』生活人新書 NHK 出版
小川芳男・安田一郎. 1961.『英語の文型と運用』平明社
大塚高信 1968.『日本の英学 100 年』研究社
小泉保 2007.『日本語の格と文型 結合価値論にもとづく新提案』大修館書店
小泉保 2009.『日英対照 全ての英文構造が分かる本』開拓社
小西友七・出口義勇 1967.『C. T. アニアンズ E. A. ソンネンシャイン』不死鳥英文法ライブラリー 2 南雲堂
影山太郎 1996.『動詞意味論』くろしお出版
影山太郎 2001.『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
加藤治之 2017.『〈文法指導〉これだけは押さえない文型指導』『英語教育』2017 年 10 月増刊号

大修館

- 川嶋政士 2014a. 「5 文型」成立事情——細江逸記の功罪『国際文化表現研究』第 10 号 pp. 33-53.
- 川嶋政士 2014b. 「英語 5 文型の再分析——“Comprehension Based Grammar”序章」『比較文化研究』No. 110 pp. 127-138.
- 川嶋政士 2014c. 「英国における「5 文型」の誕生と消滅」『比較文化研究』No. 112 pp. 21-39.
- 川嶋政士 2015. 『「5 文型」論考 Parallel Grammar Series, Part II の検証』朝日出版社
- 国廣哲彌 1980. 『日英語比較講座 第 2 巻 文法』大修館書店
- 黒田成幸 1980. 「文構造の比較」国廣哲彌. 1980. 『日英語比較講座 第 2 巻 文法』所収
- 佐藤誠司・小池直己 2016. 『「英語の仕組み」を 5 日間で完全マスターする本』PHP 文庫
- 鈴木亨 2013. 「構文における創造性と生産性——創造的な結果構文における非選択目的語の仕組み」『山形大学人文学部研究年報』第 10 号 pp. 109-130. http://www.h.yamagata-u.ac.jp/wp-content/uploads/2014/09/nenpou10_07.pdf (検索日: 2017 年 9 月 8 日)
- 竹林滋・小島義郎・東信行・赤須薫 2005. 『ルミナス英和辞典』第 2 版 研究社
- 種田輝豊 1973. 『新版 20 カ国語ペラペラ』実業之日本社
- 中村捷 2009. 「市川三喜『英文法研究』とはどんな本か——記述と説明——」東洋英和女学院大学『人文・社会科学論集』第 27 号 pp. 53-67.
- 細江逸記 1952. 『英文法汎論』改訂第 15 版 泰文堂
- 細江逸記 1971. 『英文法汎論: 英文法統辞論提要』新改訂版 篠崎書林
- フクチマミ・高橋基治 2015. 『マンガでおさらい中学英語のだいじなとこだけ』株式会社 KADOKAWA
- 南出康世 2014. 『ジーニアス英和辞典』第 5 版 大修館書店
- 桥矢好弘・福田稔 1993. 『学校英文法と科学英文法』研究社出版
- 松浪勇 1988. 『英文法』大修館書店
- 宮永國子 2014. 『大人の英語力 話せる人は知っている英語の意外な原理』青土社
- 宮脇政孝 2012. 「5 文型の源流をさかのぼる: C. T. Onions, An Advanced English Syntax (1904) を超えて」『専修人文論集』90. pp. 435-465.
- 八木克正 1999. 『英語の文法と語法 意味論からのアプローチ』研究社出版 pp. 61-71
- 八木克正 2011. 『英語の疑問 新解決法 伝統文法と言語理論を統合して』三省堂 pp. 70-80
- 八木慶太郎 2015. 「高等学校英語教科書の変遷をめぐる一考察」『國學院大學紀要』第 35 巻 pp. 149-158
- 安井稔 1973. 『英語教育の中の英語学』大修館書店
- 安井稔 1996. 『英文法総覧』開拓社
- 安田一郎 1970. 『NHK 続基礎英語 英語の文型と文法』日本放送出版協会
- 若林俊輔 1982. 『わかる英語 I』三省堂
- 渡辺勉 2004. 「翻訳指導への言語理論の応用——依存文法からの提案」『言語文化研究所総合研究プロジェクト「日本語・日本文化を核とした異文化接触ならびに交流に関する対象研究報告書」pp. 89-128 拓殖大学異文化間コミュニケーション研究会 拓殖大学言語文化研究所
- 渡辺勉 2018. 「日本の学習文法で使われる 5 文型について (上)」『人文・自然・人間科学研究』第 39 号 pp. 43-59 拓殖大学人文科学研究所
- 綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘 2000. 『ロイヤル英文法』旺文社
- Allerton, D. J. 1982. *Valency and the English Verb*. Academic Press: London, New York.
- Comrie, Bernard. 1981. *Language Universals and Linguistic Typology*. The University of Chicago Press.

- Comrie, Bernard. 1989. *Language Universals and Linguistic Typology*. 2nd edition. Basil Blackwell: Oxford.
- Dryer, Matthew S. 2007 “Word Order” in Shopen, Timothy. 2007. *Language Typology and Syntactic Description*. Volume I: Clause Structure. 2nd edition. Cambridge University Press.
- Goldberg, Adele. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hornby, A. S. 1954. *A Guide to Patterns and Usage in English*. Oxford University Press.
- Hornby, A. S. 1974. *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. 3rd edition. Oxford University Press.
- Hornby, A. S. 1975. *A Guide to Patterns and Usage in English*. 2nd edition. Oxford University Press.
- Huddleston, Rodney. Pullum, Geoffrey K. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press.
- Jespersen, Otto. 1949. *Modern English Grammar on Historical Principles*. part III, part V George Allen & Unwin Ltd. (reprinted by Meicho Fukyu-kai, 1983, Tokyo.)
- Nesfield, John Collison. 1898. *English Grammar, past and present; with appendices on prosody, synonyms, and other outlying subjects*. McMillan: London.
- Onions, Charles Talbut. 1911. *An Advanced English Syntax*. 3rd edition. Kegan Paul, Trench, Trubner & CO., Ltd.: London.
- Quirk, Randolph, Greenbaum, Sydney, Leech Geoffrey, Svartvik, Jan. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. Longman Group Limited: London.
- Quirk, Randolph, Greenbaum, Sydney, Leech Geoffrey, Svartvik, Jan. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman Group Limited: London and New York.
- Stevenson, Angus. 2008. *Oxford Sentence Dictionary*. (2008 electronic) Oxford University Press.
- Shopen, Timothy. 2007. *Language Typology and Syntactic Description*. Volume I: Clause Structure. 2nd edition. Cambridge University Press.

文部省検定済み教科書

霜崎實 他 2013. Crown English Communication I. 三省堂

準教科書

- 安藤昭一 他 1984. *Essential English Grammar*. 増進堂・受験研究社
- 牛込久男 他 出版年不明 *Step by Step English Grammar*. 一橋出版
- 江川泰一郎 1982. *A New Approach to English Grammar*. 東京書籍
- 河井迪男 他 1982. *Essentials of English Grammar*. 第一学習社
- 河上道生 他 1983. *Mastery English Grammar*. 桐原書店
- 河上道生 他 1987. *Elementary English Grammar*. 桐原書店
- 木戸一男 他 1981. *A New Way to English Grammar*. 中央図書
- 隈部直光 他 1986. *English Grammar for you*. 中教出版
- 清水貞助 他 1982. 『英文法エッセンス』 開拓社
- 杉山忠一 他 1982. 『新高校英文法』 三省堂
- 鈴木英一 他 1987. *Sprint English Grammar*. 開拓社

- 羽鳥博愛 他 1987. *Milestone English Grammar*. 新興出版社啓林館
- 福井慶一郎 他 1985. *Productive English Grammar*. 第一学習社
- 堀口俊一 他 1986. *Comprehensive English Grammar*. 桐原書店
- 水野謙二 他 1987. *Maintop English Grammar*. 山口書店
- 若林俊輔 1984. 『高校生の英文法』三省堂
- 安井稔 1985. *A Shorter Guide to English Grammar*. 開拓社
- 吉田正俊 他 1985. *Revised Unicorn English Grammar*. 文英堂